

れると共に、具體的には婦人運動となつて、それが婦人自身の手によつて行はれるに至つた。或は新婦人協會と云ひ、或は赤爛會と云ひ、何れも自覺した新しい婦人の立場より婦人自身のための社會運動を試みるものであつた。これらの新らしき、自覺した婦人の努力に依つて、「治案警察法改正案」の如きも、見事に議會を通過して、愈々婦人も政談演説を試みる機會を持つことになつた。これ我が國に於ける婦人が參政権を得た第一歩と見られるであらう。それに續いて、専ら文壇のみの問題ではあつたが、知識階級の問題が喚起して、直接經濟的生産に従事しない、即ち、經濟的利害關係より見て資本家でも、勞働者でもない藝術家、學者なるものは、果して何れに組すべきかの考察が行はれた。これ、單なる思索上の問題とは考へられないのであつて、彼等が現代社會の階級闘争を目前にして生活の不安に脅かされての實際問題なのである。これも社會主義思想の影響と見られなければならない。

斯くの如くして我が國現代思想の變遷推移を顧れば頗る錯然としてゐるが、これを分別して大體に社會主義的思想系統に屬するものと、文化主義的思想系統に屬するものと二つに定めて仕舞ふことが出来る。そして、學者、思想家も大體に於てこの二型、即ち、社會主義者と文化主義者とに分

けて仕舞ふことが出来る。一時の流行的現象に驅られて基督を昇ぎ、親鸞を持て囃して宗教味を帯ひた一派もあるが、それは恐らく大きい根底を有してゐるとは思へない。

ところが、社會主義者も、文化主義者も、何れも現在の社會制度の謳歌者ではない。現實満足主義のオプティミストでない。現代の我が國で、現状満足のオプティミストは官僚に使はれて支配階級の擁護につとめてゐる學者の一派と、安價なるベティ・ブルジョア氣分に浸り込んで得意になつてゐる藝術家の一派とである。見るところの社會主義者も、文化主義者も、即ち、マルクスのお弟子を以て任する一派も、リツケルトの學徒であることを誇る一派も共に現在の社會制度、その上に建てられた文化に對して、大なる不満を有する理想主義者である。ただ前者が飽までも資本主義の壊滅を期し、プロレタリア文化の先驅を以つて任するのに、後者は溫健に學者、思想家の立場より社會事象を批判して、それに改革を加へやうとする改良主義者を以て任じてゐる文けの相異がある。

左の如く考察して來ると、混沌たる我が現代思潮も、その根幹となるものは、理想主義でないかと思へる。現實そのものに安んじてゐられないで、その不満を何等かの方法手段により、即ち、或

はより物質的科學的な手段によりて、或はより精神的宗教的な手段によりて、批判し、改革しやうとするのが、現代思潮の主眼點ではあるまいか。そして、現代文學も、現代思潮と同様その表面は非常に混沌を極めてゐるやうに見えるが、結局は、この理想主義思想を背景として、現實主義思想を背景とした自然主義文學から一飛躍を試みやうとしてゐるのであるまいか。

## (二) 人道主義文學とその代表的作家

明治末年、自然主義文學が漸く衰頹に赴いた結果、享樂主義の文學又はネオ・ロマンチズムの文學が擡頭し、一時文壇を風靡するの概を示したが、それがやがて情話文學となり、心中小説となつて享樂のための享樂、耽溺のための耽溺の遊蕩文學に墮落した。この時に當りて、かゝる文壇の浮薄輕佻なる墮落的傾向を矯正するために現はれたのが、大正五年八月、「讀賣新聞」に掲げられた、赤木柗平の「遊蕩文學の撲滅」と題する評論であつた。論者柗平は末だ帝國大學法學部に在學する一學生といふので、小山内薫、安成貞雄その他の人々に彌次半分に反駁され、また、事實、その議論は文學藝術の何物たるかを辨へない道學者の口吻を思はすやうな、極めて單純なものにすぎなかつたが、それ

でもその論旨により健全なる理想主義文學を求むる人のそれが見えて、たしかに當時の小説界の墮落せる傾向を撃つてゐると思へるところが尠なくなかつた。宜なるかな、墮落せる享樂主義的傾向は、徒らに婦女子の涙を流す安價なる感激のみを賣物にする通俗小説の方にと漸次追ひやられて、我が文壇には健全なる人道主義を標榜する新理想主義文學が俄かに勢力を揮ひ始めたのである。

初て、この健全なる人道主義を標榜する新理想主義文學の牙城となつたのは、雑誌「白樺」であり、その代表的作家と稱される人々は、「白樺」に據れる所謂白樺派の武者小路實篤、有島武郎、志賀直哉、里見淳、長與善郎などである。大正四五年の頃より六七七年にかけて、この白樺派の人々は永井荷風、谷崎潤一郎、森田草平などの人々に代つて、文壇の主席を占め、彼等の標榜するところの人道主義は、かの享樂主義に代つて我が文壇の主潮となつた。

「白樺」が創刊されたのは、明治四十三年であつて、その同人には、華胄界の子弟が多かつた。蓋し、彼等は、學習院の高等科に學んでゐる中に、自由思想の洗禮を受け、頑な頭の學生監などが種々なる手段を用ひてこれを防がうとしたが、飽までもそれに反抗して、或はジャン・ジャック・ルツォの著書を読み、トルストイ、ドストイェフスキー、ロマン・ローランなどの小説に親しんで來た

就中、トルストイの著書は彼等の間で盛んに持囃された。露西亞の立派な貴族であつて、人類愛の使徒であり、しかも教會から破門された自由思想の學徒であつたトルストイの生ひ立ち、境遇が彼等の興味を惹き、その著書に親しませたのは無理からぬことであつた。後等は、「白樺」を發刊して以來、小説に、評論に、詩歌に、實に熱心に新文學のために努めて來たし、その意氣込みも頗る熾んであつたが、久しく文壇から閑却されて、その中心に乗出すことが出来なかつた。ところが、大正四五年の交、漸く新理想主義文學の氣運が動き初めるや、人道主義を標榜して、新興文學運動に参加し、その中堅となり、我が文壇に白樺派の旗幟を翻すに至つたのである。この白樺派に就て、赤木桁平がその「白樺派の傾向、特質、使命」と題する評論の中で次の如く述べてゐる。

「事例を遠く外國の文學史に尋ねるまでもなく、これを近くわが明治の文學史に徴して見ても文學界派とか、硯友社派とか、明星派とかいふやうな稱呼は、その稱呼自身が既にその本體を説明するに足る何等かの臚氣な觀念を予等の腦裡に寫象する。——今日予等が白樺派といふ稱呼から受けるところのものも、またこれに等しい。

尤も今日予等が白樺派といふ稱呼から受ける臚氣な觀念は果して何であるかといふ質問に出會す

と、一口には適確なる解答を與へ悪いが、藝術の効果を抽象して、その本質的方面と形式的方面とに兩分すると、先づ大體白樺派の文學は、その本質的方面に於いて著しく人道主義的であり、その形式的方面に於いて著しく無技巧的であると云へる。而して、その本質的方面に於ける特質たる人道主義的傾向が、事實に於いて、白樺派といふ臚氣な觀念を構成するために、最も肝腎なる要素であることもまたことごとしく云ふまでもない。

雜誌「白樺」が今日までにわが文壇へ送り出した作家、即ち、武者小路實篤、長與善郎、里見淳、小泉鐵、有島武郎、志賀直哉の諸氏（獨り有島生馬氏はこれらの諸氏と稍やその傾向を異にしてゐる。）は、皆何等かの意味に於いてのヒューマニストであるか、若くはヒューマニストたんとするの傾向を帯びてゐる。この動かすことの出来ない事實は、氏等の作品に接すると、何人といへども直ちに看取するところであつて、かういふ見地からすると、その色彩に濃淡強弱の差異こそあれ、氏等を以てわが文壇に於けるヒューマニストの一團と呼ぶことも、決して誣妄な言とは云へない。就中白樺派の統領とも云ふべき地位に在る武者小路氏は、その作品に於いて、將た、その態度に於いて最もヒューマニストとしての色彩の鮮明なる作家であるから、氏を以て先づ白樺派の傾向なり、特

質なりを代表するものと見て大した錯誤はなからう。

最も誠實なる人道主義は、最も熾烈なる人生肯定の上にのみ築かれる。この意味に於いて、白樺派の諸作家は、その發程の第一歩から既に熾烈なる人生の肯定者である。而して、この熾烈なる人生肯定の上に立ち、理想の至高内容を求めて「愛」の生活を主張し、最も普遍的にして、また、最も一般的なる人道主義の建設を夢見るところに、取りも直さず、氏等の藝術的態度を貫く思想上の基調がある。故に氏等は「玩味の藝術」を高調するものに對しては、明かに「主張の藝術」を高調するものであり、「藝術のための藝術」を信奉するものに對しては、明かに「人生のための藝術」を信奉するものである。——氏等の作品が、倫理的意識の著しく濃厚なるの事實を呈示するのは、全くこの點に因由するのである。

言葉を換えて云ふと、白樺派の藝術觀は、徹頭徹尾自己建設の自己築造とに終始するものであつて、「自己をより善くし、より完きものにしよう」とするところのみ、たゞ藝術の意義が存在するのである。この點に於いて、白樺派の藝術觀は、あらゆる藝術價值（藝術の傳達する感情價值）の評價を、人生の意義に就いてなすところの觀念、即ち、人が實生活に於いて善若くは惡と思惟する

ところに依つて決定しようとするトルストイ風の藝術觀と、殆んどその性質を等しうするのである（勿論藝術觀の基調に於いてのみ兩者の間に類似を見出すのであるから、藝術そのものゝ包含する屬性的方面の解釋乃至主張に於いては、その間に參商も啻ならぬ相異の存在することを否むわけには行かない。）」

白樺派の諸作家は、その當初にあつては兎に角人道主義的色彩の多い新理想主義者といふことで、大體の足並は揃つてゐたが、後年、その派の一人であつて、然かも夙に享樂主義的、若しくは硯友社的の作風を持つてゐた里見弴が、吉井勇、田中純、久米正雄、小山内薫、久保田万太郎、宇野浩二といった作家を同人又は準同人として雑誌「人間」を發刊する頃から、それぞれの個性によつて分裂の止むなきに至つた。

扱て、人道主義的な新理想主義を振翳して何處々々までも押進んで行つたのは、武者小路實篤、有島武郎その他であつて、後年この派に屬した倉田百三、「受難者」、「暗礁」を書いた江馬修、「死線を越へて」の一作を以て小説家としても立つた賀川豊彦などあるが、彼等が思想的に段々と宗教の方へ傾いて行つて、しきりと宗教的人物を取材にするや、江原小彌太、石丸梧平などの作家もその一

味に加つた。だが、新理想主義思想としての人道主義を自己の作品、感想の中に最も旗幟鮮明に表し、かの「文學界」に於ける北村透谷の如き地位にあつて、よく健闘を續けたのは武者小路實篤であつた。

### 1 人道主義派の領袖としての武者小路實篤

自然主義文學は著しく衰頹の兆を見せながらも未だ何處やらに果敢なき存在を續け、「三田文學」「スバル」などの雑誌に依る享樂主義派の文學が漸く文壇の中心勢力たらしめる場合、何れの方面の文壇の野を眺めるも、そこには何等の精神的要求を満足させて呉れるやうな藝術を發見することが出来なかつた。こゝに於てか、その物質的な自然主義の反動としてより精神的な、また、その頹廢的な享樂主義の反動としてより健全な新理想主義の文學が捲起されねばならなかつた。即ち、私共の健全なる精神的要求を満足させるだけの新文學が起らねばならなかつた。かゝる場合に於て、新理想主義としての人道主義文學が生まれたのは、寧ろ當然のことと云ふべきである。

新理想主義としての人道主義は、自然主義が人生を否定し、享樂主義が人生を迴避したのに對して、勇敢に人生を肯定する。その中心思想は愛である。釋迦の慈悲、基督の慈愛、トルストイの無抵抗主義などは何れもその源をなすものである。愛、平和、無抵抗、それらは、人道主義思想の主なる要素である故にそれが文學に現はれる場合、その文學は、自然主義の如く客觀的でなく主觀的であり、享樂主義の如く不健全に消極的でなく健全に積極的である。更に無理想的でなく、有理想的である。暗黒的でなく光明的である。かゝる人道主義思想の上に立つ文學はすでに述べた如く白樺派より生まれ出たのであつて、その中心人物と思惟されるものは武者小路實篤である。

彼は「白樺」の創刊以來、同派に於ける宛然領袖格であり、然かもいつも第一番槍を執らねばならぬ人であつて、「白樺」の六號雜記で「無車」の假名のもとに、齒の浮くやうな氣焰を揚げては、時の文壇の物笑ひの種となつてゐたがその持つて生まれた押の強さとひたむきな坊ちやん氣質で、自分のやることはどんなことでもやり通さなければ置かないといつたやうな調子で押し進んだ彼は、非常に強い自信を持つた人で、他の者が自分達の攻撃でもしやうものなら「何糞！ 今に見ろ！」と子供らしげなことを叫んだ。だが、さうした彼の態度には、全くかの北村透谷を思はずやうな熱情的な、男性的な、且つ眞面目なところがあつた。彼は一つのユートピアに類する理想を持つてゐて、一日と雖もその實現を忘れなかつた。云はゞ彼の作品のすべては、そのユートピアの宣

傳で、人類愛、平等平和といふことをその基調としてゐるのであつた。それは、他の白樺派の人々と同様に、文學的にトルストイ、ドストイエフスキーの影響、感化から來てゐるやうに思はれる。蓋し彼の如き、可なり徹底的にトルストイの著書を讀破した方で、何人よりもトルストイの心境や内部生命を味到しやうとしたところがある。また、それによつて自分自身の内部生命をも伸張させたものの如く思はれる。彼の理想主義的熱情は、人生否定的であり、物質的である自然主義文學に失望せしめられ、世界不安の状態を痛嘆し、歐洲大戰によつて益々その情懷を深くし、すべての人類が「愛」のこゝろを以て、暖かく握手し、長く内面的一致を保たんことを希求せしめたのである。かくして、彼は、人類的本能、宇宙的本能を重んじ、人類の眞心を通じて顯はれた力を信仰するに至つた。次にすこしく具體的に武者小路の人類的本能、宇宙的本能を重んじ、人類愛、平和、平等などの人道主義思想を檢致してみやうと思ふ。

「無能力者の仲間」といふ作品は、武者小路の作品の中で取立てゝいふほどのものでないかも知れないが、彼の思想傾向を知る上に非常に恰好なものである。その中で、「先生」は、人間の務めが自分を正しき人間にすることだと述べてゐる。正しき人間は案外世に役立たないやうに見えるけれど

も、正しき人間の心は正しき人間の心に憧れてゐる。正しき人間の心に觸れることによつて、深い悦びを感じる。正しき心は神を信する意志によつて與へられる。それは信仰である。全人類はそれによつて鏈がつてゐる。その中のBといふ青年は云ふ。不正なことはこの世から消えることを望むのです。しかもそれが私の感情から出るのではなく、人類の意志から出るのであつて欲しいのです。」

武者小路の思想の核心はこゝにある。この正しき心を求める意志、しかもそれは神の御名によつてである。彼の人道主義的宗教的思想はこゝに胚胎してゐる。「無能力の仲間」の先生は、「神の國をこの世に建てるといふ事は自己表現の最終の目的です。なぜかといふと、神の國は皆の心のうちにあるのですから」と云つてゐる。これもまた彼自身の思想内容を語るものに他ならない。

少年時代よりトルストイの著書を受讀し、その無抵抗主義に共鳴してゐる武者小路は、原始基督教の影響を尠ならず受けてゐる。トルストイが「我が信仰」の中に引用した「目にて目を償ひ齒にて齒を償へ」と言ふことあるは汝等の聞きし所なり。然れど我なんぢらに告げん、惡に敵すること勿れ、人なんぢの右の頬を打たば亦ほかの頬を轉じて之に向けよ。汝を訴へて裏衣を取らんとする

者には外服をも亦とらせよ。人なんちに一里の公役を強ひなば之を倍に二里ゆけ。汝に求むる者には予へ借んとする者を卻くる勿れ」の馬太傳第五章の三十八節より四十二節にかけての文句の精神は、「無能力者の仲間」(大體この題名そのものがこの思想を暗示してゐるが)、「わしも知らない」などの作品によく表現されてゐる。されば「無能力者の仲間」の先生は、戦争に就てどうお考へになるかと問はれたとき、「矢張りゆかねばならんでせう」と答へる。この先生はしかし決して軍國主義を奉ずる人でない。無辜の民を殺戮してまで領土を擴げやうなどと考へてゐる人でない。たが、彼は、血を以て血を洗ふことを欲しないのである。これ、この作品の主人公の氣持であると共に作者自身の氣持でもある。そこに、人道主義者として、社會主義者と意見を異にする武者小路の思想的立場がある。

武者小路はまた運命の不可抗力を信じてゐる。運命の不可抗力を信ずる彼は、事物の必然をも信じなければならぬことになる。「わしも知らない」といふ作品の一節に、次の如きものがある。

「目蓮。世尊！私はもうどうなつてもよろしい。どうかあの子供らを助けて下さい。たすけて下さい。」

釋迦。わしだつて助けたい。しかし助けることは出来ない。それがこの世の運命なのだ。……すべてのことは過ぎて行く。過ぎて行く嵐だ。過ぎて行く洪水だ。過ぎて行く戦だ。死屍はいくら山を築かうとも、血はよし川の如く流れやうとも、斷末魔の叫びは天地に響かうとも必らず過ぎて行くさうしてゆく先は海だ。涅槃だ。

目蓮。(他の事に心を奪はれてゐる者のやうに)涅槃で御座りますか。「斯くの如く何事も運命と觀て落着いてゐられる釋迦は、「我が教は我等の生命によつて失はれはしない」ことを信じ、過去、現在、未來の必然的過程を目睹するが故である。されど、この「必然」はマルクスの如き思想家によりて説かれる「必然」とは全然質を異にするものであるのは云ふまでもない。あれが唯物史觀より出でたるものであるのに反して、これは佛教の因果應報の理より、またシヨウベンハウエルの厭世哲學などより由來した所謂空想の所産である。人間は運命の成行を知ることが出来ないが、神や佛だけはこれを知つてゐる。だから、神や佛にさへ縋つてさへゐれば間違ひはない。それは、意志の力、信仰である。

武者小路は、異常なる意志の力、信仰をその作品の中で表現したが、彼自身がすでに非常に意志

の強い、信仰の堅い人であつた。それには彼の持つて生まれたブライドが助けてゐることもあらうが自分でかうと信じたものなら、他人が何と云はうとも押進んで行かねば措かなかつた。彼の作品には、その代表作となさるべき、「後に來るもの」、「その妹」、「おめでたき人」、「世間知らず」、「或る青年の夢」、「或る男」など文學作品としても非常にすぐれたものもあるが、中には實に下らないものもあつた。しかし、彼の表現は、その文章からして、實に獨特の味を示すもので、作者の心持とびつたり合つてゐるといふところに今までの表現に見られぬものであつた。單純であるが、しかし仲々ねばり氣が強く、讀者を同化させねば措かない底力がある。何ちらかといふと語彙の貧弱な方で、生彩に乏しいところはあるが、平明であり、快活であり、齒切れがよく伸々したところがあり、その一字一句にも彼の個性が彼の生命力が溢れてゐる。即ち、彼の精神がその文字の上に躍如として現はれてゐるのである。が、時にはだらだらと饒舌になりすぎ、獨りよがりの獨白が続くことがある。

彼の作品は、兎に角、形式の上では、あらゆる既成作品の型を踏破つたもので、作品としての味ひよりも自己の思想生活感情をより直截に訴えんとするものであつて、戯曲あり、小説あり、對話あり、詩あり、感想があるが、そのケジメもはつきりとつきかねるのである。

武者小路は、その思想を實現せんために、彼を崇拜し、圍繞する青年男女と共に、我が國創業の地である日向の一角に、「新らしい村」を建設した。それに對して、無理解なる官憲の壓迫があり、文壇や思想界からの猛烈な嘲笑があり、極く近親の者からさへ非難が出たのであるが、彼は、例の押の強さとその一本調子で他人の嘲笑や非難などに頓着なく、官憲の壓迫にも屈するところなく、どんどんと自分の道を進んで行つた。一時、非常に衰微したとのことであるが、武者小路は、同志の青年男女を激勵、叱咤しながらなほも新らしい村の生活をつゞけてゐる。

## 2 有島武郎の作品とその思想的推移

白樺派より出でて、武者小路實篤と共に、文學的にも、思想的にも、新理想主義的色彩の強い同派の特徴を發揮したのは、有島武郎である。彼は、矢張り武者小路を始めその他の白樺派の中でも人道主義的傾向を有する作家の如く、小説家又は劇作家と云ふよりは文學者と云つた側の人である武者小路に較べると、その表現の如きも然かくぞんざいで單純ではないがそれでも作品としてその味を味はせると云ふよりは、その作品を通じて作者の思想を傳へたい、極端に云へば、作品は作品として書かれるのでなく、その思想を鼓吹し、宣傳せんがために書かれてゐるやうにさへ思へる。



そして、当初にあつて、武郎の思想の中心をなし、基調をなすものは「愛」であつた。彼は、自ら揚言して、「藝術家を造るものは愛の強さ深さ高さだ」と云つたが、彼にあつて文學即愛である。宜なるかな、彼の比較的初期の作品で、その中心思想に於てよりもその巧緻にして、典麗なる表現に於て文壇の注目を惹いたところの「實驗室」、「凱旋」、「死とその前後」、「小さき者へ」、「平凡人の手紙」、「石にひしがれた雑草」などは、何れも「愛」を基調として書かれたものである。「愛」の目ざめが描かれ「愛」の體驗がにじみ出てゐる。そこに現はれた「愛」は、純一で、清澄であるが、やゝ理智的にすぎた情熱が足りないやうな氣がされる。「或女」、「迷路」、「曉闇」などは、可なり情熱的なところもあるが、それは多く誇張され、エムフアサイズされた表現のためで、その作品の底には實に冷やかな作者の理智の眼が光つてゐる。

武郎は、「愛」を基調とする、それも武者小路の如く人類愛といふよりも個人愛とでも云ひたいものを基調とする思想の持主で、小説家といふよりも思想家と云ひたいところがあつたが、弟に有島生馬、里見弴のより藝術至上主義的色彩を有する作家を持つてゐただけに、白樺派の中でも、わけ、武者小路などに較べて遙かに豊富な藝術力を持つてゐた。悪く云へば、技巧慾を持つてゐた。

「宣言」、「凱旋」、「カインの末裔」、「アツシジの秋」などの作品がよくそれを證明してゐる。

作家としての武郎は、可なり熱心なる努力を以て、「死」、「宣言」以來「星座」、「ドモ又の死」等に至るまで「有島武郎著作集」十數卷の創作を續けて來た。だが、嚴格に云つて、この十數卷の著作集を通じて見る場合、そこに作家としての武郎の如何なる藝術力の進展を見るか。彼が作家としてその當初より有してゐたものゝ硬化を見ることが出来るかも知れないが、その藝術力の進展を殆ど見ることが出来ない。そののみならず、「或女」にしても、「星座」にしても、作家としての彼が段々と高等通俗の世界に入り込まんとするところが覗はれるのである。たゞ晩年彼が彼の個人雜誌として發刊した「泉」の第一號に「ドモ又の死」といふ小戯曲を公にしたが、それは些か注目に價するものであつた。そこには可なり新味のある象徴的な表現手法を見ることが出来た。

作家としては、その晩年、文壇から取殘された如き武郎も、思想家としてまことに大なる發展をなした。「叛逆者」、「小さき者へ」及びその頃の作品に現はれた思想より見れば、武郎は明かに白樺流の人道主義者であつた。すでに述べた如く、「愛」を基調とする人道主義者にすぎなかつた。「惜みなく愛は奪ふ」に至つて個人主義的色彩がいよいよ鮮明になつて來たとはいへ、その思想の基調は

矢張り「愛」を中心とする人道主義であつた。

個人主義的人道主義者として、社會主義者、左傾思想家、プロレタリア評論家などから、恰も武者小路と同一の作家の如く思はれてゐた武郎は、大正十一年の正月、突如「宣言一つ」なる文章を發表して、極めて消極的な意味からではあるが、階級思想運動の中へ飛び込んで行つた。即ち、「宣言一つ」は社會思想運動に参加せんとする武郎自身の宣言に他ならなかつた。

「宣言一つ」によつて、武郎は、現代社會に於ける一個のインテリゲンツィヤとして、またブルジョアとしての自分の立場を明かにした。しかし、それは、彼の思想發展の一時期を印するものであつて、彼の思想はそこに踏み止まるべきものでなかつた。彼の心的生活には大飛躍が試みられた。が、こゝに於て彼の有する社會地位、といふよりもその附屬物、即ち、莫大なる私有地や私有財産が却つて甚だ煩はしい係累になつた。そこで、彼は、心的生活の革命に先達つて、外的生活の革命が必要になり、その莫大なる土地と財産との放棄が企てられた。そして、その一部は、彼が生前にすでに實行されたのである。

斯くして、作家として何等注目すべき人でなくなつた武郎も、その晩年は、思想家として私共の

最も興味を以て眺むべき人になつた。感想集「藝術と生活」の中の「想片」や講演筆記「新舊藝術の交渉に就て」などを見れば、彼は、すでに現代社會に於ける階級の存在を認めるばかりでなく、階級文化、階級文學の存在さへも認めやうとしてゐる。けれど、世のボルシェヴィストやアナキストがマルクスやその「共産黨宣言」を眺めるのと、彼がそれを眺めるのと、その眺め方が異つてゐる。武郎にはマルクスは階級闘争に人間性解放の眞理を描出した詩人の如く、そして、その「共産黨宣言」は、詩の如く思はれてゐる。

斯くの如く、武郎は、内外共に急激なる生活革命を企てやうとしたために、その思想はともすると亂調子になり勝ちであつた。そして彼の如き眞面目なる生活人、即ち一元的な生き方をしてゐる者にはこの思想の亂調を小器用に隠すが如き藝當は出来なかつた。たゞ自分の思想的立場をより明かにしやうとする努力より他なかつた。「泉」の第二號と第三號とに於て、倉田百三に與へた公開狀は蓋し武郎の思想的立場を鮮明にするために企てられたものであつた。

百三の思想家としての態度は、その感想集「靜思」の序文に於て明かにしてゐるが、それを要約すればかうである。思想家が眞理を探索するために、強ち現實の實際問題と交渉する必要はない。思

想家はよろしく時代を超越しなければならぬ。眞理を求めるところにすこしでも功利的目的が伴隨してはならない。眞理は普遍的のものであり、絶對的のものである。

それに對して、武郎は、自己の思想的立場より批評を加えて次の如く述べた。思想家はたとへ永遠の眞理を探求するものであつても、彼等の生活から現實界との交渉を絶ち切れればその生活は空しくなつて仕舊ふ。思想家はまた時代を超越してゐるのでなく、時代を包含しなければならぬものだと思ふ。功利的目的のみで眞理は求められないが、眞理探求の目的の中には、功利的目的が求められてゐたことは争はれない。それで、眞理は有限的のものであり、相對的のものである。

武郎は、そこで、思想家のタイプを即實派のそれと、理想派のそれとに區別して、百三等は所謂理想派思想家であるが、自分等は即實派思想家だとしてゐる。現實派と云はず、即實派と稱したところに、曾て我が思想界を風靡した現實派でないことを明かにするためであらう。

元來、武郎は、「理想」と「實行」との間に、また「藝術」と「生活」との間に、徑庭の認められなかつた人である。「精神」か、「行動」かと、フランス文壇で最近アンリ・バルビュスとロマン・ローランとの二頭目が火華を散らして戦つたさうであるが、彼にはこの戦ひは要らない。何故なれば

實行し得ざるものなれば、如何なる綿密、崇高なるものと雖も、「思想」としてまことに價値のないものである。「思想」の價値は實行となつて初めて定まる。「實行」のないところに思想はない。

「傳習録」の著者王陽明は、「知行合一」の哲理を説いてゐるが、武郎の思想家としての態度は、この「傳習録」の著者のそれとびつたり合致するのである。

個人を圍繞する現實の渦巻の中に胚胎する思想から自己を生かす眞理の實を求めやうとする武郎と個人を圍繞する現實の渦巻から隔離しても眞理の塔に立籠つて、自己の心内に胚胎する思想の渦に耽らうとする百三とは、思想家として相似たる如くして、全く相異せる立場に臨んでゐる。

斯くの如く觀察して來ると、晩年の武郎の思想生活は頗る面白いものとなり、その將來に對して尠なからず興味を持たれたのであるが、大正十二年の初夏突如として人妻にして當時「婦人公論」の記者であつた波多野秋子と信州輕井澤に於て情死した。この事件は、武郎が夏目漱石没後、我が文壇に於ける唯一の學者であり、英國風の温厚な紳士であり、且つ一代の人格者と云はれ、その崇敬者も多かつただけに、是非の議論が諸方面より囂々として起つた。彼の全著作は、「有島武郎全集」十二卷に收められてゐる。

## 3 その他の人道主義派の作家とその作品

白樺派の作家の中で、人道主義的色彩を有するものは、武者小路實篤、有島武郎の他に、長與善郎がある。彼は、その藝術力に仲々豊かなところがあり、白樺派の中では夙に小説らしい小説を書く人、完成した作風を有する人として知られてゐたが、その思想に於て、武者小路や武郎ほど徹底したところがなかつた。彼等ほどしつかりした人生觀も信仰をも持つてゐなかつた。が、その作品を通じて認められる作者の態度には、極めて肯定的な、光明的な、積極的なところがあり、「愛」と「正義」の擁護のために何處々々までも戦つて行かうとする勇氣を持つてゐた。そこに、男性的な強さがあると共に子供らしい優しさがあつた。そして、この二つの要素が反撥することなく、しつかり合つて、彼の一身に融會してゐた。小説「盲目の川」、戯曲「項羽と劉邦」は、その特色を遺憾なく發揮してゐる點で、彼の代表作と云つてよいものである。

「盲目の川」の主人公NはSに戀して以來、非常に眞剣に、熱烈にSに向つて行つた。然るにSは飽までも邪慳にNの熱心な眞剣な戀を受け入れないで、何處までも冷酷に、無情にあしらふ。それでも、NはSに對する最初の誠實心を變へない。そこに悲壯な、しかも何處やらしほらしげな感

情が出てゐる。また、「項羽と劉邦」の中に描かれた項羽は、「力」の英雄であると同時に「愛」の英雄である。敵に向ふ時は偉大な狂獅子のやうであるが、虞姬に對する時は野菊の花のやうに優しくなる。蓋し、このNといふ哀れな男の悲壯な、可憐な感情に於て、英雄項羽の愛人に對する優しい心根に於て、善郎は、自分の生活感情をそこに表白したのである。

その表現には、太い線でぐんぐんと押進んで行くやうな力強いところがある。その文章に、妙な生硬な感じのする手觸りや幾分の稚氣を伴はないでもないが、それらは、その行間に漂ふ彼の力一杯の眞實心で補はれてゐる。彼には、作家として、武者小路の押の強さと一本調子を思はせるやうな力一杯の眞實心が何よりの強味である。

倉田百三は、その作品を通してみると、明かに愛の福音を説くところの人道主義者である。彼は「白樺」の最初の同人ではなかつたが、後年、「白樺」派の人となり、大正十三年に發行した「不二」といふ雑誌は、彼を中心として創刊されたものであが、武者小路實篤、長與善郎その他の人々もそれに後援してゐる。

扱て、百三の人道主義の基調をなすものは基督教乃至は佛教である換言すれば、宗教的情操がそ

の基調となつてゐる。彼は恰も眞摯、敬虔なる求道者の如き態度を以て、不調和なる人生の奥に調和を見得る境地に達せんことを希願し、「出家とその弟子」、「俊寛」、「布施太子の入山」などの戯曲は何れもさうした希願の心から生まれたものである。

その中で、「出家とその弟子」は、彼の代表作であると共に、一代の名作として世評を喚び出したものであつた。

百三は、この作品に於て、人間を罪あるものと見てゐる。人間を罪惡の魂だと見ると共に、佛教的な厭世思想の根本をなす、西方を淨土と見、現世を穢土と見る人生觀に終始してゐる。死は、それによつて佛の御手に歸ることを意味するのであつて、死をそれほど怖ろしいとは思はない。むしろ悦び勇んで死につく。即ち、死は永遠の生を意味してゐるからである。

百三のクラシックを脱れてその思想によつて自分の人生觀を立てやうとすることは、現代人の生き方に矛盾したものだといふ非難もある。しかし、十九世紀末の自然科学のなした業績に一步も足を踏み入れないで直ちに人間の心の堂奥に馳せ参じようとした手輩は、一人「出家とその弟子」の作者に限らず彼を非難する人々が非常に新らしいと思つて隨喜する所謂思想家、文學者の中にも存

群てゐることを知らなければならぬ。今、私共がこの「出家とその弟子」の作者に於て取らんとするところは、穢土と思惟する現世に住み、罪惡に充ちた人間でありながら、信仰の一念によつてよくそこから救はれんとする意志の力に興味を感ずるのである。また世人が百三の作品に蝟集して來たも、その作品が世人に思ひがけない感激を與へたのもそのためではあるまいか。

宗教的情操といへば、元來、自然主義文學の系統のもとに生まれ出た吉田絃二郎も、段々とそちらの方へ向つて行くところが見える。即ち、彼は釋迦、基督、トルストイ、ドストイェフスキー、芭蕉などの人物、思想を只管に讚美し、専ら宗教的な傾向をその小説に現はすやうになつた。だが、彼の作品は、武者小路の作品に現はれてゐる人道主義といつたやうなはつきりとした思想が現はれてゐない。彼の作品に現はれてゐる思想乃至は人生觀といつたものは殉情主義である。宗教的な敬虔な氣分の中に、甘美、哀愁の涙を降りそゞいであるといふのが、彼の作品基調をなすものである。されば、その作品はいつもセンチメンタルな感情に妨げられて、觀察の明敏と批判の透徹を缺いてゐることが多い。「島の秋」は彼の出世作とも云ふべきものであるが、「人間苦」、「熊のわな」などに於て、その藝術力の一進歩を示し、「芭蕉」、「ダビデと子たち」に於て、その宗教的傾向をはつきりと示し

てゐる。將來、彼は、この傾向に向つて進んで行くのであるまいか。「西郷吉之助」は、彼の唯一の戯曲で、また尠なからず世評を喚起したものであつた。

その他、人道主義的、宗教的傾向を有する作家として、「死線を越えて」の賀川豊彦、「新約」の江原小彌太、「人間親鸞」の石丸悟平などがあるが、その何れも時好に投じたところがあつて、その作品に思想的に深い根底もなければ、藝術的に芳醇な香もなかつた。

### (三) 新技巧派・新現實派・舊自然派の鼎立

在るがままの現實生活に打突つて、その中に味到せよ、觀照せよ、そこに始めて文學は生まれる主義もなくともよい理想もなくともよい始めなく終りなく、無解決のまま放り出された人生の姿で結構である。かの自然主義文學の提唱は、斯くの如く文學の意義を定めた。それは、没主觀主義の文學であり、没理想主義の文學である。自然主義文學提唱の急先鋒であつた島村抱月は、「觀照の藝術」といふ言葉でうまくも新興自然主義文學の特質を説明した。眞に現實世界に渦巻く諸相を通觀して、その味ひに徹しやう、そこに私共の創作的感興を囚へる何物かある。所謂「觀照の世界」が

ある。自然主義文學の上より見れば、そこに始めて文學は生まれ出たのである。

客觀的、傍觀的、無關心な態度を以てあらゆる人生の諸相を描き出さう、如實に人生の姿を再現しやう、そこに自然主義文學運動の目的があり、意義があつた。國木田獨步、田山花袋、島崎藤村、長谷川天溪、島村抱月等の努力は、この目的の貫徹、意義の實現にかゝつてゐた。そして、明治三十九年から四十一年にかけて、彼等の異常なる努力は、世間的迎合と相俟つて、この目的を或る點まで貫徹せしめ、また、この意義を或るところまで實現せしめた。

ところが、明治四十三四年からその末年にかけて、自然主義文學は漸く沈滞の色を見せた、そのころへ俄かに勃興して來たのは、享樂主義・新浪漫主義の文學である。それは、或る者によつては自然主義文學の反動と云はれ、或る者によつてはその分化と云はれたが、客觀的、傍觀的、無關心な態度で人生の諸相を描き出さうとするのでなく、そこに多少の主觀を混え、情操を注ぎ、思想さへ加えて描き出さうとするのである。それらは、明治末年から大正二三年にかけて、永井荷風、谷崎潤一郎、森田草平、鈴木三重吉、小川未明などの諸作家、阿部次郎、安倍能成、小宮豊隆などの諸批評家の努力によつて、相當の仕事をしたのであるが、享樂主義には固確な人生觀上の理想

があるわけではなかつたので、いつしか新内情調と呼ばれ、近松情調と呼ばれ、更に、祇園情調、下町情調と呼ばれるやうな情話文學に墮落した。この時、文壇には早くも澎湃として寄せ来る新興機運があつた。それは、人道主義文學である。人道主義文學は、新理想主義文學であつたか、それが幼稚であらうが、單純であらうが、兎に角人道主義といふ人生觀上の理想があつた。されば、その作品は藝術的といふよりも、より思想的であつた。そして、この人道主義文學は、その後、思想的に多少の分化も見ないことはなかつたが、武者小路實篤、有島武郎、長與善郎、倉田百三などの諸作家及び和辻哲郎、赤木桁平、三井甲之、廣津和郎などの諸批評家によつて、すでに相當の仕事がなされたし、また將來も大いになされやうと思はれる。

扱て、この人道主義文學に續いて、我が文壇に勃興したのは、新技巧主義の文學であり、新現實主義の文學である。前者は人道主義文學に較べると藝術的であり、技巧的であるが、思想的には人道主義文學の如くはつきりしたものがない、人生の諸相をそれぞれの好みに應じて描き出さうとするところ、些か「觀照の藝術」に逆戻りした形である。だが、自然主義文學の如く殊更に没主觀的態度を執らうとしない、と云つて、享樂主義文學の如く憧憬追憶のみに耽り、官能の享樂を恣にし

やうとする如きものでもない。非常によくこれを解釋すれば、人道主義文學に於けるが如き露骨なる理想は作者の主觀の中にそつと潜めて置いて、それぞれの作者の趣味と好尚とに基き、勿論、多少の主觀も混え、批判意識も出して、人生の諸相を最も藝術的に表現せんとする、それが新技巧主義文學ではあるまいか。また、後者であるが、それは云ふまでもなく、現實内容をより廣く、より自由にしたところの現實主義文學であつて、先づ第一に忠實なる觀照を標榜するところに舊自然主義に類似の點があるが、その現實が廣まり、自由になつてゐるから、作者の態度も自然主義の場合の如く、必らず没主觀的であらねばならないといふ理由はないのである。而して、新技巧主義文學は、里見弴志賀直哉、水上瀧太郎、有島生馬、豊島與志雄、芥川龍之介、久米正雄、菊池寛、佐藤春夫、宇野浩二、瀧井孝作、中戸川吉二、南部修太郎、小島政二郎、佐佐木茂索、岡田三郎、牧野信一、室生犀星、佐々木味津三などの諸作家により、また、新現實主義文學は、加能作次郎、加藤武雄、中村武羅夫、谷崎精二、廣津和郎、葛西善藏、細田源吉、細田民樹、水守龜之助、相馬泰三、木村毅、戸川貞雄、下村千秋などの諸作家により、本間久雄、江口渙、廣津和郎、赤木桁平、南部修太郎、田中純、宮島新三郎、西宮藤朝などの批評家と相俟つて、大正文學界の大勢を形造り、今なほ熾んに

活躍してゐるのである。

現下我が文學界には、この二大主潮の他に一時盛んに活躍したが、目下些か鳴を鎮めてゐるところのプロレタリア文學及び將來の我が文學界の主潮を以て任ずるところの新感覺主義文學とがあるしかし、そのことは後節に譲るとして、こゝで述べて置かねばならないのは、舊自然主義派の消息である。自然主義文學の頭目と云はれた國木川獨歩は、明治四十一年にすでに倒れたが、田山花袋正宗白鳥、島崎藤村、徳田秋聲、岩野泡鳴、上司小劍、中村星湖、近松秋江などの安否は如何に？その中で、泡鳴は最後の大活躍をなした後、大正九年、溘然とこの世を去つたが、他の諸作家は、例へば、花袋にしても、白鳥にしても、秋聲にしても、秋江にしても、星湖にしても、次から次に押し寄せて來る新文學思潮に漂ひながらも、それぞれによく自己の流域を守りながら進んで來たそしてそれぞれに相當の藝術的進歩を見せるやうな作品を公にしてゐる。宜なるかな。諸種の理由で文壇を隠退した二三の者の他は、何れも今なほ我が文壇に相當の勢力を揮つてゐるのである。

### 1 新技巧派の文學とその代表的作家

新技巧派の作家で最も重望されるのは、志賀直哉と里見淳とである。彼等は、何れも武者小路を

頭梁とした「白樺」創刊以來の同人であつたが、いつしか武者小路等の人道主義文學から離れて行つた。ところで、直哉と淳との文學的傾向も新技巧主義は新技巧主義であるが、相當の間隔があるやうに思へるのである。

志賀直哉は、非常に藝術的良心の強い作家であつて、決して多作したり、濫作したりない。彼は白樺派の他の作家と同様に人生に對して著しく肯定的で、正義と愛とを尊重するが、それを主觀的に表面に出さうとしない。即ち、正しきものを尊敬する共に、正しからざるものにも理解と同情とを以て向ふ。だから、その態度は飽までも純客觀的で、善惡、美醜、邪正などをはつきりと區別するやうなことをしない。その表現は、非常に技巧を凝らすものだけあつて、渾然とした味が出てゐる。その文章は、明快で、簡潔で、清澄で、一分一厘の隙がない。實に整つたといふ感じのするものである。それだけに、武者小路などの無技巧なそれと違つて、非常に技巧を凝らして、一字一句も疎かにしないといつたやうな緊張した氣持で丹念にこつこつと書上げられたものであるといふことがわかる。

直哉が「白樺」創刊號に掲げた「綱走まで」といふ小説は、非常に單純な題材を捕へたものであ



る。可なり幼稚なところもあるが、なほ運命に對する淡々しい哀愁と人格を貫くヒューマンな情緒とが人の心に染み入るやうに力強く現はれてゐる。彼は、この小品を以て早くも文壇の一方に認められたが、その後、「剃刀」、「彼と六つ上の女」、「濁つた頭」、「老人」、「正義派」などを公にした。或は尖つた神經を、或は人間の眞心を、或は世紀末的苦悶、或は病的官能を、何れも主觀の鋭鋒を収めた純客觀的態度で描き出したのであるが、そこには作者の明晰なる頭腦を思はせる透徹した觀照がある。

「大津順吉」、「和解」は共に長篇とはいへないまでも相當長いものであつて、何れも父親に對する彼自身の心の葛藤を描いた自叙傳小説とも云ふべきもので、その愛憎の二面に亘る複雑なる心的葛藤を展開した内容といひ、その完備せる表現といひ、後年公にした長篇「暗夜行路」と共に、彼の代表作であり、新技巧派の作品中での逸品である。

「表現即内容」を主張して止まない里見弴は、徹頭徹尾技巧派の人である。作家としての彼は、理智的でなく主情的であると云はれ、理想的でなく現實的であると云はれるが、表現技巧のうまみによつて自己の作家的力量を認めしめ、その醇化に進んで來たのである。うますぎると云はれた彼

の技巧も最初はどこやらワザとらしいところもないことはなかつたが、それが段々と圓熟して、渾然たる風味を出すに至つた。

弴は、最初、泉鏡花の作品に傾倒したために、その手法、題材の上に鏡花の影響が尠くない。その好んで怪奇的な事件を取扱ひ、遊里の人物及びその空氣を描き、その文脈に潑刺味があり、才氣があり、加之、デカダンの色とロマンチックな匂ひとを出してゐるのは、全く鏡花の影響と云はなければならぬ。「實川延童の死」、「少年の嘘」、「勝負」、「箱根行」の極く初期の作品から「母と子」、「晩い初戀」、「夏繪」、「善心惡心」、「三人の弟子」、「無題」、「俄あれ」、「妻を買ふ經驗」、「子殺し」に至る頃までの彼の小説はこのことをよく證明してゐる。この中で、「無題」、「俄あれ」などは、彼の名聲をして俄かに高からしめたものである。

その後、弴は、「毒草」、「父親」、「おせつかさ」、「直輔の夢」、「多情佛心」などを公にして、漸く鏡花の影響から脱して、自己獨特の藝術境を開拓し、新技巧派の驍將として、その細緻なる表現技巧と深刻なる心理描寫の完璧を示すに至つた。無論、そこには多少の破綻はあり、筆力の熾んなるにまかせて書きなぐる粗略さはないでもないが、摺んだ題材を自由自在に表現する豊かなる才分、その文

章の間に横溢せる藝術的感興は當代無比の觀があつた。

また、孿は、吉井勇、川中純、久米正雄など、共に雑誌「人間」を創刊して、小山内薫、久保田万太郎、宇野浩二などがそれに後援し、一時、人間派の勢力文壇を壓倒するの概を示したが、孿は宛然視友社に於ける尾崎紅葉の如き地位にあつた。

新技巧派の中堅をなすものは、舊白樺派の志賀直哉、里見孿の他に、専ら帝國大學文學部出身の者によつて組織されてゐた雑誌「新思潮」より現はれた豊島與志雄、芥川龍之介、久米正雄、菊池寛などがある。

豊島與志雄は、龍之介、正雄、寛などは一足先に文壇に現はれたためでもあらうが、同じ新技巧派に屬するとしてもその色彩を異にしてゐる。與志雄の藝術の世界は、明知と清澄のそれである彼の作品から受ける感じは、澄み切つた秋晴の青空を見るが如きものである。そこには、些の混濁もなければ、暗愚もない。朦朧漠としてその底に生温い濕氣を湛へたやうな晩春初空の空模様を思はせるところは到底彼の作品より感得することは出来ない。同様に露西亞のリアリスチック・シムボリストであつても、アンドリエーフとザイツェフとの藝術の世界から受ける感じは違つてゐる。一

方が飽までも頹廢的で、幻影的であるのに反して、一方は何處までも靜寂の境と清澄の境に浸つて行くばかりである。與志雄は日本のシムボリストといふ名に相應はしからぬところを多分に持つてゐるが、なほ一味どこかに此の靜寂と清澄の境に浸り込まうとする露西亞作家の容姿を似通はせるところがある。

彼が現實の底を見張つて行かうとするところは、確かにリアリストのそれらしい觀照がある。しかし、表現手法に於て、全然リアリストのそれによつてゐない。主觀を潜め、理想を蔽ひはしてゐるが、その作品には、明かに作者の主觀の閃めき、理想的情熱を仄めかしてゐるのである。「反抗」、「生あらば」、「野ざらし」、「幻の彼方」などは、何れも短篇とは云ひながら相當に長い。「反抗」の如きは三四百枚もあらう、雄篇であり、彼の代表作でもある。

芥川龍之介は、「お律とその子等」、「一塊の土」その他の現實の人物を題材としたものに、非常に手堅いリアリストとしての手腕を示すこともあるが、大體に於て新歴史小説家と云はれ、事實、考證遺聞に托してものした歴史小説の方に彼の作家としての特色が現はれてゐる。彼の作品は、彼の藝術家的な氣稟、豊富なる學識と趣味そこから生まれて來るのである。そのデイレツタントらしい

風手、また、その明澄な文章さへ、かの「あそび」を文學の上に提唱した森鷗外を思はせるところが多い。

龍之介は、技巧派の隨一である。その歴史小説は、極めて巧緻なる表現、題材の選び方の氣の利いてゐることに於て、他の追隨を許さない。その完備せることは、志賀直哉の小説と同様で寸分の隙もない。「今昔物語」などから引出されたものと思へる材料も、彼の手にかゝると非常によく生かされる。その表現にはすこしの無駄がなく、その色調には極めて高雅なものがあり、明澄なものがある。彼は、形式の上に色々なる工夫を凝らし、或は對話體を用ひたり、古風なスタイルを使つたりしたが、それが彼にあつては如何にもイタについてゐたので、また一脈の興趣がある。「ある日の大石内藏之助」、「戯作三昧」などは、彼の作風を最もよく現はしてゐるものである。

派出で、輕快で、然かも興趣の深い表現の中に、一脈の人情味を藏するのは、久米正雄の作品である。流暢なる行文の間に興趣を横溢させてゐるその作風は、かの長田幹彦のそれをも思はせるものがある。正雄の作品には、幹彦の作品の如く、そこに深い人生觀が潜めてあるわけではなく、思想的背景があるわけでもなかつたが、前者には、後者の如くたゞ婦女子の涙をさそふやうな安價、低

級なところがない。「銀貨」といふ作品の如き、恰も享樂主義末派の手になるかと思へるものであるが、「祇園情話」に收められてある如きものとは些か類を異にしてゐる。しかし、正雄の作品が龍之介や寛やその他の新技巧派の作品に較べて、著しく通俗味を持つてゐることは確かで、作者自身の失戀を描いた「螢草」が婦女子の讀者の間に異常な喝采を博した如きことはそれを證據立てゝゐる。その後、彼は、専ら婦女子を相手とする通俗小説の世界に自分の路を開拓して行つた。

菊池寛は、龍之介、正雄にやゝ後れて文壇に現はれたが、その異常なる努力精進と、その俗衆によく通ずる作風とによつて、忽ち、「現文壇の重鎮」と云はれる地位を獲得するに至つた。

寛は、すでに自分自身の周圍の事を描いた「無名作家の日記」、「青木の上京」、「大島の出来る話」、「父の顔」その他を公にして、題材の捉へ方の巧妙とその的確、簡潔なる表現と作品の中に漂へる作者の純情とによつて、立派に新技巧派の作家たるの特色を示してゐたのであるが、彼の技倆の眞に認められたのは、歴史を主題として、人間の本能を力強く表現した「忠直卿行狀記」、「恩讐の彼方へ」などを公にして以來のことである。事實、これらの二篇は、その題材の捉へ方の巧妙、それを表現する筆致の簡潔にして的確、しかも一脈の快い純情を漂はすといふ、彼の作風の特色を遺憾な

く發揮してゐるものである。忠直卿の近代人的な性格、市九郎の罪惡から懺悔奉仕への一生それらは私共の胸に測々として迫つて來るところがある。

寛は、武者小路なでの人道主義者の如く、人生觀上に明確なる理想を持つてゐるわけでないが、案外に正義人道に囚はれてゐる、良心の鋭さがある。彼にはすこしも感情的なところがなく飽までも冷靜で、よしんば感情が頭を擡げるやうなことがあつても、それを理性で抑壓してゐるやうなところが見える。されば、彼の作品は、そのテーマなどはつきりとしすぎてゐて、何となく理窟づくめで、彼の理智を弄したといふやうな趣が見えないでもなかつた。換言すれば、テーマを巧妙に捉へるといふことが、小説にオチをこしらへるやうなことにならぬでもない。しかし、さういふ彼の作風は専ら初期のものに多く、殊に佳作と評判の高かつた「肉親」以後、その所謂テーマ小説の方向を轉ぜんとするところが見られる。これ彼のテーマ小説も行詰まつたものと思はれる。

歴史小説に於て、寛は、龍之介の如くたゞ單に考證遺聞に托するのみでなく、一箇のテーマを史實の中から見出してそこに人生の一面を暗示し、若しくはその道德批判を仄めかさうといふのであつた。「蘭學事始」「俊寛」「亂世」「船醫の立場」「入れ札」「仇討三態」などは、この方面の佳作とな

されてゐるものである。

なほ、寛は、戯曲「藤十郎の戀」「父歸る」「屋上の狂人」その他多くの一幕物を公にし、それらは大體にアイルランドの劇作家の行き方をしたものであるが、その材題と云ひ、その取扱ひ方と云ひ、何となく現代人の好尚に的中した。「藤十郎の戀」は中村鴈次郎によつて東西劇場に於て上演された。「父歸る」その他の一幕物は、守田勘彌、市川猿之助、澤田正二郎などによりて屢々上演され何れも大好評を博し、劇作家としての菊池寛の聲名は、その方面に於ける先進の作家をも壓倒するの概を示してゐる。

寛は、また、大正十二年一月、文藝雜誌「文藝春秋」を自ら編輯人となつて創刊した。最初はそれに大して力を注ぐ心はなかつたのが、圖らずも世の非常に歡迎するところとなるや、その事務的手腕を専らこの方面に揮ふに至つた。加之、彼の門下の俊英は、「文藝春秋」を踏み臺として競ひ立ち後繼文壇は彼等によつて形勢されんとの状態を示した。横光利一、佐々木味津三、中河與一、今東光、川端康成などは、その尤なるものである。が、後、彼等は、「文藝春秋」と袂を別つて、あらたに「文藝時代」を創刊し、その中の或る者は所謂新感覺主義なるものを提唱するに至つた。

新技巧派の作家の中で以上の諸家の他になほ重きをなすものは、佐藤春夫、室生犀星、宇野浩二の三人である。

春夫と犀星とは共に詩人から散文の畑へ入つて來ただけあつて、その取材と云ひ、その文章と云ひ、詩人肌の抜け切らないところがある。春夫は、かの谷崎潤一郎に似てゐて、潤一郎よりは遙かに近代人的な憂鬱性と病的官能を有し、その趣味に即した世界に於て、その異色ある空想を恣にすると共に、鋭い感覺を働かす。大正七年、雑誌「中外」に公にした「田園の憂鬱」は、田山花袋をして激稱せしめた彼の出世作であり、彼の作風を遺憾なく發揮してゐる。その後、彼は都會の憂鬱、「佗しすぎる」、「美しき町」などを公にしたが、何れも詩人的氣稟ある表現の中に近代人的憂鬱性と病的官能の匂を強く示してゐる。新技巧派の中で最も新時代に通ずるところの多い彼は、將來の活躍を大いに期待される作家である。さういふ意味で、彼は、すでにクラシックの作家であると同時に、新進作家たるの風采をより多く有してゐるのである。

犀星の作品は、如何にも詩人の手になれるかと思へる繊細な技巧を凝らした表現の中に、デカダンの風味が濃く、性慾の色合が強く出てゐる。即ち、彼は、曾ての水野葉舟のそれを思はせるやう

な線の細い、女性的な文章で、自分自身の見た周囲の氣分、情調、色合などを描き出してその鋭敏でデリケートな官能の匂ひを漂はすを得意としてゐる。「性に眼覺める頃」、「蒼白き巢窟」などは、この彼の作家的特徴を如何なく發揮した代表的作品集である。

「浮出人情嘶」の眞打と定評のある宇野浩二は牛のよだれのやうな長々しい饒舌の中に深く人情の機微を穿つ作家である。彼の處女作「藏の中」が「文章世界」に現はれたのは、大正八年のことであり、それに續いて同年また「苦の世界」を出し、そのふざけ散らしたやうな滑稽諧謔のリズムの中に一脈のベースが流れてゐる獨特の作風は、浩二をして俄かにその聲名を高からしめた。如何に物悲しげな、また、如何に陰鬱な生活も、一度彼の筆に上ると、自からユーモラス・トーンが生まれ非常に明るい、快活な調子を帯びて來た。チェホフの短篇や戯曲に見られるやうであるが、悲劇を滑稽化し滑稽の中に悲劇を潜めてゐるといふ、その作風は、當代無比のもの、彼の獨壇上として他の追隨を許さない。

浩二は、「藏の中」、「苦の世界」を書いてから、續々とその「浮出人情嘶」を公にしたがやがて幾度か轉期に立つた。しかし、今のところでは、「苦の世界」に於て示した彼の作家的資質を段々と深め、

廣めて行くのみで、その作風の上に、大した轉換も見受けられないやうである。

## 2 新現實派の文學とその代表的作家

私は、現代の小説界に中堅となつて活躍する作家を便宜上、その作風より見て、新技巧主義派と新現實主義派との二流派に分別したが、享樂主義、人道主義以後の現代を總括して、新現實主義文學となし、その作家を新現實派の作家と呼ぶ文學史家もある。で、私が新現實派となすのは、その新現實派の中でも最も新現實主義の文學の色彩の濃く思へるもののみを選んだのである。さりながら、その分類にも多少の無理のあることは知つて置いて貰ひたい。

扱て、私の呼ぶ新現實派の中で代表的に最も活躍して來たしまた現に活躍してゐるのは、廣津和郎、加能作次郎、加藤武雄、葛西善藏、谷崎精二、水守龜之助、また、長篇小説に専ら努力を傾倒してゐる中村武羅夫、細田民樹、細田源吉などである。

廣津和郎は、新現實派と云はれるには、その作品にしても、その評論にしても、著しく理想主義派的の風格を具へてゐる。されど、彼は、武者小路、武郎、善郎などの人々から見ればその基調は矢張り新現實派の人である。批評家から始めて小説家たる名乗りを揚げるべく、大正七年、

「中央公論」に公にした「神経病時代」には、その批判的な筆致に何處やら理想主義的風格を示してゐないでもなが、その後、續々として公にした作品、例へば「悔」、「死兒を抱いて」などの比較的長篇と思へる作品は、何れも新らしい意味に於ける現實主義を基調とするものである。その觀察には頭腦の明晰を思はせる、非常に光つた、鋭いところがある。その表現は、可なりぞんざいで、時に平淡にすぎ、冗漫に流れることもあるが、わざとらしい技巧を弄してない素直で、癖のない筆致は讀者に快い感じを與へる。佐藤春夫、宇野浩二などと共に過去よりも將來の發展を思はせる作家である。

過去よりも將來の發展といへば、「世の中へ」に於て、自分の幼年時代の思ひ出を抒情味の豊かなその癖、あまり技巧を弄してゐない素朴な筆で描き出し、頗る豊かな人生味を示した加能作次郎もその一人である。一時、「躑躅」、「悪戯」などで、彼には道草的の作風を見せると、人々は「色氣ある筆致」と稱して讚めたため、彼自らも多少迷つた形であつたが、その後、彼は、再び「人情の世界」に歸り、新らしい意味での現實派の人として、人生の諸相をその素朴な筆致で描いて行くやうである。彼の如き、新現實派の作家として最も重きをなさねばならぬ人ではあるまいか。

新現實派の作家として、作次郎から直ぐ聯想に浮ぶのは、加藤武雄である。彼の作品の基調をなすものはセンチメントである。殉情である。その素直で、純朴な筆致の中に、清らかなセンチメントが流れてゐる。その初めは、すこしそれに耽れるといふところがないでもなかつたが段々とその藝術的感興の中にしつくりと溶け込んで行つて、今では漸く渾然たる味ひを出さうとしてゐる。「祭の夜の出來事」、「嗚咽」、「終列車」などは、その彼の作風を遺憾なく發揮したもので、その代表的佳作と云はれやう。彼は、その素朴で、清純な、地味なしかも一脈の新味を有する作風を以て、郷土小説の世界を開拓して行つて、種々佳良なる作品を公にしてゐるが、粗野ながらも純朴に育てられた少年仙太の主家の娘に對する可憐な戀を描いた「仙太の戀」の一篇の如き、その中でも最も佳良な作品である。

武雄は、近年、短篇小説よりも専ら婦女子を相手とする通俗小説の世界に自己の路を開拓し、そこに於て、一家の見識と抱負を示さんとしてゐるが、彼の通俗小説は、長田幹彦、久米正雄などのそれに代つて、新時代のポピュラーの中心とならんとしてゐる。

葛西喜藏は、徳田秋聲の門より出た作家で、その簡潔で、しかも仲々に神経を働かせてゐる表現

は、秋聲のそれを思はせるものがある。「子を連れて」の一篇は、俄かに彼の名聲を明からしめたものであるが、非常に寡家であつて、「子を連れて」「不能者」他一二の短篇集に收められた作品あるのみで、近來その傾向が益々熾んになつて行く。これ、果して悦ぶべきか。悲しむべきか。免に角貧に居てその貧の生活を靜觀し、沈靜せる生活を味ひ描かうとするのが、彼の最近の行き方である彼の如き、或はこのまゝ段々と衰頹して行くのか、それとも素晴らしい元氣を出すのか目睹しがたい作家の一人である。が、その透徹せる觀照は、新現實派の中にあつて得難きものゝ一つである。

新現實派の作家には、なほ以上の他に、水守龜之助と谷崎精二とがある。前者は、自分の周圍の事件及び日常生活の些末事を描いて、ユーモラス・トーンを混へながら軽い人生味を見せることゝ、取材を把握することの堅實さを以て知られる作家であり、後者は、淡い哀愁の世界を克明な筆致で描き出すことによつて、可憐な人情味を出す、創作の上にすこしもトリツクのない、誠實な態度の作家として知られてゐる。

新現實派の作家で長篇に専ら努力を傾けて來た人、また傾けてゐる人が多い。中村武羅夫、細田源吉、細田民樹などはさう云ふ作家の代表者であり、武羅夫の「人生」、源吉の「罪に立つ」、民樹の

「極みなき破局」、「或る兵卒の記録」(これは短篇集と見られないが一貫した長篇と見るのが至當であらう)などは、それぞれの代表作である。武羅夫には、短篇は一つ二つあるだけだが、源吉と民樹の兩人は、相當に多く短篇をも公にしてゐる。

### 3 舊自然派・享樂派の作家の現状に就て

大正年代に入つて、それも専ら新技巧派、新現實派の活躍に入つた大正五六年以後の我が文壇に於て、舊自然派並びにその次に現はれた享樂派の人々は如何なる状態に置かれてゐるか。それを茲に展望してみうと思ふ。

舊自然派の中で引續き活躍してゐるのは、田山花袋、正宗白鳥、徳田秋聲、島崎藤村、岩野泡鳴、中村星湖で、非自然派享樂派の方では、夏目漱石は大正五年末に「明暗」の稿半ばにこの世を去り、高濱虚子は小説に行詰まつて、再び俳句の方に戻り、森鷗外は殆ど小説の範圍を脱したる歴史物、傳記物に没頭し、森田草平、鈴木三重吉は全く小説界から身を退け、ひとり谷崎潤一郎、久保田万太郎、小川未明などが活躍してゐる。が、その中で、未明は、その社會主義的文學の色彩が益々濃厚になつて、プロレタリア文學派の御大に祭り上げられ、従つて文壇的には別途の活躍をなすに

至つたのである。

扱て、上記の人々の中で最もよく活躍をなし、その特徴を發揮したのは、泡鳴である。彼は、大正七年、「新潮」の誌上に於て、所謂一元描寫論なるものを掲げて、徹底的に一元描寫を主張し、その具體化として「征服被征服」を公にした。それは、皮相なる客觀描寫から一步を踏み出して、主客融會の趣を實現し、自分の行きつけるところまで行きついたといふ觀があつた。この作を公にした前後に、泡鳴は、「毒藥を飲む女」、「憑物」を書いて、益々小説界に活躍せんことを期してゐたのであるが、大正九年溘然としてこの世を去つたのは惜みてあまりある。彼の著作はその「泡鳴全集」十二卷の中に全部收められてゐる。

潤一郎の耽美的惡魔的な傾向は、文壇に人道主義文學が擡頭した頃、多少下火になり、「異端者の悲しみ」の如き人道主義文學にも通ぜんとするものを書いたのであるが、やがて「ハツサンカンの妖術」「嘆きの門」、「AとBの話」などを書いて再び自己の境地に戻らうとした。されど彼はこのときすでに小説には行詰まつてゐることを知り、それから後、専ら戯曲の方に向つて行つた。万太郎は、「雨空」の他の作品に於て「ものゝあはれ」の世界にと益々深く入つて行つて、何物かを突止めんど



してゐるやうである。

花袋は、すでに述べた如く、自然主義文學の提唱者であつたが、その彼も古い意味に於ける自然主義の世界から脱せんとするところが、「一握の蘘」あたりで見えたが、「ある僧の奇蹟」、「残雪」になると、その心の動きがはつきりと見られたが、徹底的に自然主義の境地から脱して、一飛躍することも出来ず。佛教の世界にと心の動きを發見した。人生流轉の相、それは涅槃の心で眺めやうとする彼の境地は、大正五年に公にした「時は過ぎゆく」に現はれてゐる。

この花袋に對して、藤村は、大正二年から五年に亘る外遊を前後して、最も勇敢に自己改造を行つた。そこには何物をも捨て、藝術のみに行きやうとする人の大膽な、そして勇敢な態度を見るこゝとが出来た。外遊の後、世間に發表した「新生」一巻はよくこれを證據立てゝゐるのである。それは、一箇の沈痛なるヒューマン・ドキュメントである。三人の子の父親として長く獨身で來た四十男の世間へ顔向も來出ない行爲が懺悔の涙で洗ひ清められやうとするところは、自然主義時代の彼の作品には見られないところで、著しく情意的であり、主觀的である。これによりて、藤村が自然主義から他へ一步轉じやうとする心持や態度ははつきり見えたが、その後公にした「或る女の生涯」

や「三人」などの作品に於て、その心境の上に大なる進展を見受けることが出来なかつた。

花袋、藤村が、自然主義の世界から何とかして脱出し、飛躍しやうと焦燥し、然かも遂に徹底的の飛躍もならず、そのまゝ老朽ちて行くやうに思へる時、彼等と同じく自然主義作家として活躍して來た白鳥は、別に自己の世界から飛躍しやうともせず、頗る落着拂つた態度で、自己の世界を深めて行き、表現の上に益々洗練を加えてゐる。秋聲は、白鳥ほど作品を多く發表しなかつたが、矢張り彼と同様自己の世界をそのまゝ深めて行かうとするのみである。

星湖は、この期に入つて、新主觀主義的傾向に轉じ、或は問題小説を提唱し、或は傳統主義を鼓吹し、その堅實なる作風を益々發揮した。「失はれたる指輪」といふ短篇集にはこの期に於ける彼の作品が收められてゐる。

#### (四) プロレタリア文學の勃興とその衰退

我が大正文學界——それは専ら小説界のみに就ての觀察であるが——は、以上の如く、新技巧派新現實派舊自然派の三派が鼎立して、それぞれの分野を占めてゐるのであるが、私共の理想より見

れば、彼等の作品には甚だしき不満がある。先づ、彼等の作品の中に一世の人心を指導し、社會の風潮の魁をなすが如き思想を見ることが出来たであらうか。在るがまゝの現實生活を描寫した裏に社會批評をなさうとする始き作者の氣魄を見ることが出来たであらうか。新しき生命の創造を目的とする如き意氣を見出すことが出来たであらうか。「文學は社會に後れたり」いふが如きことは、文學の何物たるを解することなき人々から云はれた暴言であるといへ、文學作品が遂に「觀照の世界」より一步も向ふへ踏み出し得られないのは事實である。だが、文學作品は「觀照の世界」にのみ踏み止まるべきものであらうか。

大正三年の初夏に勃發して以來數ヶ年の日月と數百億の富と數百萬の人命とを費消した歐洲大戰は世界の人心をその根底より轉覆せしめた。人間生活の改革と新生活の創造といふことが等しく學藝思想に参加するものと協同目標となつた。歐洲大戰を分水嶺として舊世界と新世界とに分たれることになつた。

舊世界に於て存在した舊生活の形體は、その根底より崩壊すべき必要に迫まれてゐる。そこには、理想主義的精神があり、社會改革の熱情がある。新世界の文學は、云ふまでもなくその精神、

その熱情より生れた新生活創造の文學であらねばならない。自己を圍繞する社會の渦巻によつて試練を受けた魂の生んだ文學である。ふところ手して小さくなつてゐる文學でなく、手を擴げて大きくなつてゐる文學である。隱遁者の文學でなく、戰鬥人の文學である。素より確かなる目標を置いた文學である。恐ろしき創造力と力の世界を示したるロマン・ローランの「ジマン・クリストフ」十卷は、蓋し、さうした文學の先驅として生まれたものである。

すでに述べたる新生活の創造とその理想主義的精神に燃えた文學こそが、現代の新興文學と名づけらるべきものであらねばならぬ。それには、すでにあるところの社會組織を崩壊して、新なる社會組織を建設せんとする意氣込みが現はれてゐるであらう。社會の大多數者が共通に意識する何物かを示されてゐるであらう。作品を通して見る作者の主觀には、立派なる思想もあれば、主義もある。そして、それらのものは「觀照の世界」に終始した文學には見出し得られないものである。

「新興文藝の使命」と題する論文で、吉江喬松は、次の如く述べてゐる。「新興文藝は、飽までも、從來の文明の表面に立ち現はるゝを得ず、自己等の表現を持つを得ず、しかも一國の大多數者を形成してゐる階級の覺醒を隆起基調とすべきである。」實に、新興文學の實力は、新世界の支配者たるべ

く約束せられたる社會の大多數を形成してゐる新興階級の手にある。然れども、未だ自ら文學創造の實力を養成すべき情態に置かれざる新興階級はこの階級の覺醒隆起をなさしめる事によつて新世界の文明が創造されることを信ずる智識階級の力を借らねばならぬ。故に、今暫らくはこの智識階級によつて、新興文學は養育される實情にあるが、その眞純、健實なる發達は、新興階級の支配力の獲得と共に行はれるであらう。

大正十年頃よりの我が文壇に於て提唱せられるところのプロレタリア文學は云ふまでもなくこの種の新興階級の文學に他ならない。されど、未だ社會の實力がプロレタリアの有に歸せざる現今の我が社會では、そのプロレタリア文學といふも、將來の隆起を思はせる眞純、健實なるプロレタリア文學の素地をなすものである。即ち、現今のプロレタリア文學は、プロレタリア階級を自覺せしめその文學の興隆を刺戟すべき文學運動と見做されるであらう。以下、評論界、小説界に就てその狀況を些か檢攷してみやう。

### 1 プロレタリア文學派の評論家

我がプロレタリア文學に對しては、評論家の新進が非常なる後援をなした。蓋し、最近の我が文

壇に擡頭したる文藝批評家は、何れも皆相當に強いプロレタリア意識の持主である。現今の資本主義に對して甚しき憎惡を抱き、その感情が自から社會主義的社會組織の當來を欣求する人々である。

その思想は各多少の相異あれ、社會主義である。現今社會の崩壞を期する革命思想である。反逆思想である。部分的改造を嫌つて根底からの轉覆を望むラディカリストである。

斯る批評家の中で、最も早く既成文學破壊の叫びを揚げたのは、加藤一夫である。「一隅より」、「勞働文藝」、「自由人」等の小冊子の刊行を企て、それによつて彼は大いにブルジョア文學の排撃に努めたが、すでにその前より彼は熱心なるトルストイアンであり、人道主義者であり、民衆藝術の提唱者であつた。「民衆藝術論」は、民衆藝術の論客としての彼の面目を躍如たらしめてゐる。されど、民衆藝術の提唱者としての彼には未だ何處にかトルストイ流の人道主義的口吻に、加えて宣教師上りを思はせる説教調の鼻持ならぬものがあつた。ところが、彼が中野の書齋より出でて明治會館又は青年會館の壇上に立ちて世のあらゆる無産階級者のために熱烈なる代辯を揮ふやうになつて、彼の批評家としての態度もがらりと變つた。彼は一個の卓越せる革命思想家として、プロレタリア文學の最も有力なる戰士になつたのである。彼は思想系統から云ふと、大杉榮などと同じくアナキ

ズムに屬してゐる。

一夫にすこし後れて我が文壇に現はれた、プロレタリア文學の有力なる闘士は、平林初之輔と村松正俊とである。大正八九年から十年頃にかけての批評界は實に寥々として人なきが如き有様であつた。で、その批評的態度の極めて明白なる初之輔と、論理の正確と文章の雄勁を以て誇る正俊とは、單なる文藝批評家としても、我が文壇に得難き新光彩であつた。宜なるかな。その始めは、初之輔は一個の文壇革新主義者であり、正俊は論理主義者といふ面影を多分に持つてゐた。ところがアンリ・バルビュスと共にそのクラルテ運動に参加したといふ小牧近江が佛蘭西より歸國し、世界主義を標榜する雑誌「種蒔く人」を創刊するや、初之輔、正俊の二人もその同人に加はり、批評家としての面目を一新した。初之輔は、堺利彦、山川均などの流れを汲むマルキシストであり、その唯物史觀といふ武器を以て戦ひ、正俊は、豊富なる近代思想に對する智識的背景と精鋭なる論理とを以て、何等容赦するところなく、既成文學の牙城をその土臺より攻撃することになつた。後に至つてプロレタリア作家として最も優秀なる活躍を見せた藤井眞澄、前田河廣一郎の二人は、批評家としても眞に痛烈なる巨彈をブルジョア文學に向つて投ずる人であつた。次いで、津田光造、松本弘二、松

本淳三、今野賢三等の雑誌「種蒔く人」に據る人々は何れも皆プロレタリア文學の有力なる闘士として、熾んに活動をなした。

なほ、この他に、プロレタリア文學派の評論家として、武藤直治、青野季吉、小島徳彌、相田隆太郎、伊福部隆輝等の名を擧げることも出来るが、その中で、季吉は最も精彩ある闘士であつて、純粹の文藝批評家といふよりは、社會批評家としてまた實際運動家としてより力強い活動を示す人である。また本間久雄、千葉龜雄、片上伸、吉江喬松、宮島新三郎などの文藝評論壇の先進の人々も我が文學界の現狀に大なる不満を抱き、プロレタリア文學に對して好意ある言説を寄せた。

## 2 プロレタリア文學派の諸作家

扨て、加藤一夫、平林初之輔、村松正俊その他の有力なる文藝批評家が、何れも皆プロレタリア文學派の闘士として既成ブルジョア文學——新技巧派及び新現實派の文學を彼等は斯く呼んでゐたのである——の牙城に突撃し、プロレタリア文學の隆起を高唱するに及び、そのプロレタリア文學といふものは、たしかに我が文壇の一つの呼び物になつたが、新興文學としての實力を容易に見せることが、出来なかつた。それは、云ふまでもなく、優秀なる言論、熱烈なる巨彈のみ徒らに現は

れて、それに伴ふプロレタリア作家といふものゝ姿が見えなかつたからである。中村吉藏、小川未明、江口渙、長谷川如是閑、藤森成吉、宮島資夫、秋田雨雀、宮地嘉六などの先進作家がすでに有する文壇的地位を利用して、社會主義小説乃至は戯曲、労働小説乃至は戯曲にその新開拓地を見出さうとしてゐたが、新興プロレタリア作家としては何處かに物足りないところがあつた。

ところが、藤井眞澄、新井紀一、前田河廣一郎、内藤辰雄、中西伊之助等の新進作家は多年の隠忍努力を以て大正十年から十一年に至り漸く文壇の中心に乗出すに及びて、明かにプロレタリア文學派の實力を見せるに至つた。

眞澄の「吹雪の町」その他の戯曲は、何れも盛んなるプロレタリアの反抗意識とその情熱を以て書かれたものである。あまりに反抗意識が強くて、いきり立ちすぎる結果、創作としての効果を阻むことも尠くないが、その精神に於て、その態度に於て、彼の云ふ既成ブルジョア劇作家の間に見られぬ力強いものを有つてゐる。最初、自然主義文學の悪影響が尠ならず彼の新鮮味を缺いてゐたが、その後形式の上に表現主義の方に向ふらしいところが見られる。

「二人の文學青年」、「燃ゆる反抗」、「雨の六號室」などの作品集を公にした新井紀一は、その當初、プ

ロレタリア作家として最も華やかな活動を示した人である。筋肉労働者としての實際經驗と内省の豊かな彼の人格とは、極めて地味ながらも、着實にプロレタリアの生活を見詰めてゐた。その作品の表面にはそれほど強い反抗氣勢も階級意識も見られないが、プロレタリアの強味と弱味とを遺憾なく嚙み分けてプロレタリアの行くべき路を示してゐる。

前田河廣一郎は、短篇集「三等船客」を以てプロレタリア作家の名をなした人であるが、その三等船客といふ作品はあまりにプロレタリア作家のものらしくない。そこには場末の銘酒屋か、新開地の洋酒店でも思はせるやうな、さつくばらんな空氣は出てゐるが、プロレタリアの反抗意識らしきものは何も出てゐない。描寫の手堅さは充分に見えるが、それもどうかすると自然主義流のものにならうとする。批評家としての彼の意氣は、作家として自ら殺すところがあるやうに思はれた。「裏切る」といふ一篇は、多少彼のプロレタリア作家としての面目に接することが出来た。

「空に指して」の作者内藤辰雄は、現今のプロレタリア作家の中で、最も豊かなる筋肉労働の經驗を有し、作家たる以前、すでに労働運動の一方の統帥者であつた。良い意味にも、悪い意味にも純粹のプロレタリアの感情の持主である。他に多くの短篇も公にしたが、矢張り「空に指して」が一

番の力作と思へる。そこには、彼のプロレタリア作家としての全面目が躍如として出てゐる。

中西伊之助は、専門の小説家と云はれないが、プロレタリア文學の陣營に加つた、有力なる作家の一人であつた。その「死刑囚と其裁判長」その他の短篇に於て、驚くべく立派なる創作能力を示した、關東大震災の折、暴徒と見做されて惨殺された平澤計七も亦純粹の労働者で、プロレタリア作家の一人である。彼は特に民衆講談、民衆劇に秀でてゐた。

その他、プロレタリア作家と稱されるものに、金子洋文、今野賢三、山川亮、山田清三郎、井東憲、吉田金重、上野虎雄、佐野袈裟美、加藤由藏、中澤靜雄などの作家があり、夫々熾んに活躍し相當の作品を書いてゐるが、就中、洋文は、「地獄」その他の佳作を多く公にし、最も作家的資質の豊かな人として知られてゐる。

### 3 プロレタリア文學派の分裂と衰退

プロレタリア文學は、猛烈なる勢ひを以て既成文壇の牙城に迫り、混沌たる大正文學界の潮流は、プロレタリア文學の方に移行行くかと思はれ、その實力に於て多少及ばなかつたところがあるといへ、その氣魄と意氣込みは優に大正文壇を乗取るだけのものがあるやうに思へたが、社會事情

が未だそれを許さなかつた。プロレタリア文學は大衆文學だと叫ばれながらその大衆は所謂講談物語の類かそれとも矢張り既成作家の作品に集まるのであつて、一部の青年を除いて、プロレタリア文學は世間的人氣を得ることが出来なかつた。その上に、大正十二年の春頃より、種々なることに源因して、プロレタリア文學者の間に分裂が生じ、彼等は最初の使命や目的も忘却して相反撥するやうになり、プロレタリア文學沈滞の聲漸く四方に揚る、そのまた矢先、同年九月一日、關東大震災が勃發し、その文學界に及ぼした影響のために、プロレタリア文學は益々衰退に赴き、或る者は潔く文學界を退きて筋肉労働者の昔に歸り、或る者は方向の轉換を行ひ、また或る者は一時の我慢だと稱して講談物語に僅かに餘命を保つ状態に陥つた。

會て、プロレタリア文學の發生を促した新進評論家の努力も今は空しく、また、それに尠なからず好意を寄せた先進評論家の言説も何等酬いられるところなく、プロレタリア文學の陣營は散々に分裂して仕舞つた。一時熾んに云はれた共同戦線と云ふことも、藝術家的な嫉妬、羨望といった風の小感情に囚はれて、それを固守することが出来なかつた。プロレタリア文學の最後の目的とされるところを全然忘却して、一時の名聲にのみ憧れてゐるといふやうな、彼等が呼んで云ふブルジョ

ア作家と何等異るところなき根性は、遂に今日見るが如き惨目な状態を醸したのである。

プロレタリア文學もその作家の深い人格に根差して生まるべきものであつた。その人間の止むに止まれぬ生活感情、それから生まるべきものであつた。ところが、プロレタリア文學の上に降つて來た一時の機運は、その作家をして非常に安易な、檢束のない、出鱈目な創作態度を執らすことになつた。その證據に、彼等の藝術的精進とも云ふべきものはまるでなく、自分等はプロレタリアであるから、自分等の生活をたゞ書きさへすればよいといふ風になつた。

それに、文學の方面に直接あまり關係のないところのアナーキズムとボルシエヴィズムとの抗争が文壇のプロレタリア文學に分裂を來した一因となつてゐる。「種々く人」(後「文藝戦線」と改題する)の同人を初め、ボルシエヴィズム側の人々によつてプロレタリア文學の本陣は乗取られ、アナーキズム側の人々はやゝ取残されたといふ感じである。従つて、この兩主義は、その間に溝をこしらへて、事ある毎に抗争するやうになつた。そして、それが思想上の抗争でなくて、單なる勢力争ひなのである。

何れにしても、集團の力を以てして始めて勝利の榮冠を得ることの出来るプロレタリア文學が斯

くの如く分裂しては、それ自身段々と勢力が減退して、やがて解體の運命に逢着しなければならなくなつた。

私は、こゝで既成プロレタリア文學が全然解體したとは云はないが、そのあまりに細々しい餘炎を見るとき、それが再びぱつと明るく燃えだすであらうと豫想することが出来ないのである。何故なれば、彼等は、その氣魄に於て、その意氣込みに於て、當初の熾んするところをすべて無くしてゐる。しかし、プロレタリア文學そのものは、このまゝで我が文學界から永久に消えてゆくであらうか、再び文學界の中心に乗出すことがないであらうか。既成プロレタリア文學の再熱を期待することは出来ないとしても、プロレタリア文學そのものゝ再熱を私かに期待する私は、將來の文學が再び民衆の生活に接近し、時代に觸れ、階級意識に目覺め、然かも最も新らしい、最も力のある、藝術味の横溢せる表現形式を以て生まれ出ることを大膽に、しかし確實に豫想するものである。

—終—

## 明治大正文學年表

### 明治元年

- 江戸、東京と改稱せらる。
- 東京遷都。
- 昌平校復興。
- 徳富蘆花、北村透谷、内田魯庵(不知庵)生る。

### 明治二年

- 開成所、兵學校、昌平校を合して大學校と稱せらる。
- 各府縣に小學校を設けらる。
- 福澤諭吉の「西洋事情」第二篇「世界國盡」出づ。

### 明治三年

- 中村敬宇の「西國立志編」出づ。
- 假名桓魯文の「西洋道中膝栗毛」出づ。

### 明治四年

- 「横濱毎日新聞」創刊、日刊新聞の最初なり。
- 魯文の「安愚樂鍋」、「胡瓜圖解」出づ。
- 島村抱月、田山花袋、徳田秋聲、高山樗牛生る。

### 明治五年

- 東京に女學校及び圖書館が設けらる。
- 「東京日日」創刊。
- 學制頒布。
- 横濱に始めて基督教の教會堂設けらる。



□ 島崎藤村、樋口一葉生る。

明治六年

□ 東京外國語學校設けらる。

□ 森有禮等の明六社組織せらる。

□ 「郵便報知」創刊、「報知新聞」の前身なり。

□ 福地櫻痴、野に下りて「東京日日」に入る。

□ 泉鏡花、網島梁川生る。

明治七年

□ 西周等ローマ字採用論を唱ふ。

□ 服部撫松の「東京新繁昌記」出づ。

□ 「讀賣」、「朝野」二新聞創刊。

□ 成島柳北の「柳橋新誌」出づ。

□ 明六社の「明六新誌」出づ。

明治八年

□ 新島襄、同志社を京都に設立す。

□ 小栗風葉生る。

明治九年

□ 服部撫松の「東京新誌」生る。

□ 中村敬宇の同人社より「同人社文學雜誌」發行せらる。

□ 「明六雜誌」廢刊。

□ 熊本バンド成る。海老名彈正、小崎弘道等の基督教弘布の結社なり。

明治十年

□ 西南の亂起る。八月にて鎮定さる。

□ 柳北の「花月新誌」生る。

□ 「團々珍聞」、「穎才新誌」生る。

明治十一年

□ 與謝野晶子生る。

明治十二年

□ 織田純一郎の「花柳春話」出づ。反譯小説の最初なり。

□ 學士院を設く。

□ 「大阪朝日」創刊。

□ 「歌舞伎新報」發刊。

□ 教育令公布。

□ 河竹默阿彌の「霜夜鐘十字辻占」出づ。

□ 永井荷風、正宗白鳥生る。

明治十三年

□ 「六合雜誌」創刊。

□ 東京大學第一回文科卒業生を出す。

明治十四年

□ 國會開設の大詔煥發せらる。

□ 中江兆民の「政理叢談」出づ。

□ 默阿彌の「島衛月白浪」出づ。

明治十五年

□ 東京専門學校設立せらる。早稻田大學の前身なり。

□ 「時事新報」創刊。

□ 外山、山等の「新體詩抄」出づ。

□ 兆民の「民約譯解」出づ。

明治十六年

□ 矢野龍溪の「經國美談」出づ。

□ 坪内逍遙の「該撒奇談」出づ。

□ 兆民の「維氏美學」出づ。

明治十七年

□ 成島柳北逝く。

□ 「今日新聞」創刊、「都新聞」の前身なり。

□ 「かなのくわい」起る。

□ 角藤定憲、大阪に壯士芝居を起す、新派劇の

最初なり。

□藤川鳴鶴の「文明東漸史」出づ。

明治十八年

□硯友社起る、「我樂多文庫」を出す。

□逍遙の「小説神髓」、「當世書生氣質」出で、明治小説界の曉鐘となる。

□ローマ字會起る。

□官制改革、内閣設置。

明治十九年

□明治學院創立。

□「反省雜誌」生る、「中央公論」の前身なり。

□帝國大學令發布。

□末廣鐵腸の「雪中梅」出づ。

□山田美妙齋、「風琴調一節」を出して、言文一致體を唱ふ。

明治二十年

□徳富蘇峰等の民友社組織せらる、「國民の友」創刊。

□東京音樂學校創立。

□「哲學雜誌」生る。

□蘇峰の「新日本の青年」出づ。

□「葉亭四迷の「浮雲」出づ。

□須藤南翠の「新装之佳人」出づ。

□柴東海散士の「佳人之奇遇」出づ。

明治二十一年

□三宅雪嶺等の政教社組織せらる、「日本人」創刊。

□東京美術學校創立。

□「我樂多文庫」公刊せらる。

□「東京朝日新聞」創刊。

□落合直文の「白菊の歌」出づ。

□「葉亭の「あひどき」「めぐりあひ」出づ、共にツルゲネフの反譯小説なり。

□末松青萍の「谷間の姫百合」出づ。

□美妙齋の「夏木立」出づ。

□「都の花」生る。

□「大阪毎日新聞」創刊。

□巖本善治の「女學雜誌」生る。

明治二十二年

□「我樂多文庫」、「文庫」と改題され、後、「江戸紫」「千紫萬紅」と改めて繼續さる。

□森鷗外等の「しがらみ草紙」生る。

□春陽堂の「新小説」生る。

□政教社の「日本新聞」創刊。

□美妙齋の「胡蝶」出づ。

□逍遙の「細君」出づ。

□幸田露伴の「露團々」出づ。

□尾崎紅葉の「色懺悔」出づ。

□廣津柳浪の「殘菊」出づ。

□鑿庭算村の「むら竹」出づ。

□森田思軒の「探偵ユツベル」、「警使者」出づ、共にゾイクトル・ユーゴの反譯小説なり。

□鷗外等の譯詩集「於母影」出づ。

□高田半峰の「美辭學」出づ。

□歌舞伎座落成す。

明治二十三年

□民友社の「國民新聞」創刊。

□國學院設立。

□教育勅語發布。

□露伴の「口劍」出づ。

□鷗外の「舞姫」出づ。

- 紅葉の「伽羅枕」出づ。
- 宮崎湖處子の「歸省」出づ。
- 新島襄逝く。

明治二十四年

- 田口卯吉の「史海」生る。
- 坪内逍遙の「早稻田文學」生る。
- 齋藤綠雨の「かくれんぼ」「油地獄」出づ。
- 紅葉の「二人女房」出づ。
- 少年文學第一篇として巖谷小波の「こがね丸」出づ。お伽文學の先驅なり。
- 村上浪六の「三日月」出づ。撥鬢小説の名あり。
- 中西梅花の「梅花詩集」出づ、新體詩集刊行の嚆矢なり。
- 川上音次郎の新派劇起る。

- 中村敬宇逝く。

明治二十五年

- 落合直文、「淺香社」を結びて、和歌革新に努む。
- 正岡子規、同志と共に俳句革新に着手す。
- 「萬朝報」創刊。
- 北村透谷等の「文學界」生る。
- 紅葉の「三人妻」出づ。
- 露伴の「五重塔」出づ。
- 鷗外の「水沫集」出づ。
- 不知庵の「文學一斑」出づ。
- 教育家對基督教徒の間に宗教教育衝突論起る。

明治二十六年

- 「二六新報」創刊。
- 民友社の「十二文豪」、博文館の「世界文庫」

發刊され、歐米文學紹介の端緒開く。

- 逍遙の史劇論出づ、劇文學革新の第一聲なり。
- 不知庵の「罪と罰」出づ、ドストイェフスキの反譯なり。
- 高山樗牛の「瀧口入道」出づ。
- 露伴、「風流微塵藏」に着手す。
- 透谷の「蓬萊曲」出づ。
- 河竹默阿彌逝く。

明治二十七年

- 日清戰役起る。
- 「しがらみ草紙」廢刊。
- 逍遙の新史劇「桐一葉」「早稻田文學」に連載さる。
- 紅葉の「心の闇」出づ。
- 北村透谷自殺す。

□假名桓魯文逝く。

明治二十八年

- 四月、清國と媾和す。
- 「帝國文學」「太陽」「文藝俱樂部」「文庫」生る、「文庫」は「少年文庫」の改題せるものなり。
- 田岡嶺雲の「青年文」出づ。
- 俳會秋聲會起る。
- 文藝評論漸く勃興す。
- 樋口一葉の「にごり江」「十三夜」「わかれ道」「われから」出づ。何れも好評なり。
- 泉鏡花の「夜行巡查」川上眉山の「うらおもて」出で、觀念小説の名あり。
- 廣津柳浪の「黒蜥蜴」出で、深刻小説の名あり。
- 紅葉の「不言不語」出づ。
- 江見水蔭の「女房殺し」出づ。

□露伴の「新浦島」出づ。

明治二十九年

□竹越三又等の「世界之日本」生る。

□「新小説」再興。

□鷗外等の「めざまし草」創刊、「しがらみ草」紙の後身なり。

□新聲」創刊、「新潮」の前身なり。

□紅葉「多情多恨」を「讀賣」に掲載し始む。

□柳浪の「今月心中」、「河内屋」、「變目傳」出づ。

□一葉の「たけくらべ」出づ。

□後藤宙外の「ありのすさび」出づ。

□小栗風葉の「寝白粉」出づ。

□逍遙の「牧の方」出づ。

□奥謝野鐵幹の「東西南北」出づ。

□二葉亭譯ツルゲネフの「片戀」出づ。

□鷗外の論文集「つき草」出づ。

□樋口一葉、若松賤子、末廣鐵腸逝く。

明治三十年

□井上哲次郎等日本主義を唱え、「日本主義」を創刊す。

□「新著月刊」生る。

□福地櫻痴、歌舞伎座の立作者となる。

□鷗外、小金井喜美子の反譯合集「かげ草」出づ。

□島崎藤村の詩集「若菜集」出づ。

□國木田獨歩、田山花袋、宮崎湖處子等の「抒情詩」出づ。

□繁野天來、三木天遊の「鈴虫松虫」出づ。

□二葉亭譯ツルゲネフの「浮草」出づ。

□獨歩の「源おぢ」出づ。

□若松賤子譯の「小公子」出づ。

□「一葉全集」出づ。

□逍遙の「沓手鳥孤城落月」出づ。

□紅葉「金色夜叉」を「讀賣」に掲げ始む。

□森田思軒逝く。

明治三十一年

□佐々木信綱の竹柏園より「心の花」生る。

□正岡子規等の「ホトトギス」生る。

□「國民の友」、「早稻田文學」共に廢刊さる。

□藤村の詩集「一葉舟」、「夏草」出づ。

□日本派の句集「新俳句」出づ。

□魯庵(不知庵)の「暮の二十八日」出づ。

□風葉の「戀慕流し」出づ。

□露伴の「二日物語」出づ。

□鏡花の「辰己巷談」出づ。

明治三十二年

□「反省雜誌」、「中央公論」と改題さる。

□樗牛の「時代精神論」出づ。

□鷗外の「審美綱領」出づ。

□土井晩翠の詩集「天地有情」出づ。

□薄田泣菫の詩集「暮笛集」出づ。

□子規寫生文を始む。

□小杉天外の「蛇いちご」出づ。

□徳富蘆花の「不如歸」出づ。

□鏡花の「湯島詣」出づ。

□川山花袋の「ふるさと」出づ。

□菊地幽芳の「己が罪」出づ。

明治三十三年

□「歌舞伎」生る。

□「小天地」生る。

- 東京新詩社創立され、「明星」生る。
- 宙外等田園生活論を唱え、田園小説を始め。
- 天外の「はつ姿」出づ。
- 鏡花の「高野聖」出づ。
- 獨歩の「郊外」出づ。
- 大西操山、外山、山逝く。
- 明治三十四年
  - 「精神界」生る、自由なる新佛教雑誌の先驅なり。
  - 樗牛「文明批評家としての文學者」を「太陽」に掲げ、次いで、「美的生活論」を公にする。前者はニイチエを讚美せるものにしてこれよりニイチエ論起り、後者は本能満足主義を高く唱したるものなり。
  - 天外「はやり唄」を出して、ゾラの寫實主義を論ず。
  - 獨歩「武藏野」、「牛肉と馬鈴薯」出づ。
  - 中村春雨(吉藏)の「無花果」出づ。
  - 與謝野晶子の歌集「みだれ髪」出づ。
  - 金子薫園の歌集「片われ月」出づ。
  - 河井醉茗の詩集「無絃弓」出づ。
  - 藤村の「落梅集」、泣菫の「行く春」、晚翠の「曉鐘」出で、詩壇全盛なり。
  - 福澤諷吉、中江兆民、大橋乙羽逝く。
  - 明治三十五年
    - 永井荷風、「地獄の花」を出し、ゾライズムを唱ふ。
    - 獨歩の「酒中日記」出づ。
    - 花袋の「重右衛門の最後」出づ。
    - 綱島梁川の「宗教的の性質」出づ。

大正十四年六月一日印刷  
大正十四年六月五日發行

明治大正文學史觀與附  
大正新文學史觀與附  
(定價金四圓二十錢)



著者	小島徳彌
發行者	東京市麴町區飯田町四丁目二十番地 海老原丑之助
印刷者	東京市下谷區池之端七軒町卅七番地 横山喜助
印刷所	東京市下谷區池之端七軒町卅七番地 敎文社印刷所

發行所

東京市麴町區飯田町四丁目廿番地

敎文社

電話四谷四二一一番  
振替東京三三七二四番

538  
203

終

